



	アラビアン・ナイト 〈ラング世界童話全集13〉別巻
N.D.C. 933	アンドルー・ラング 川端康成 野上彰 共訳 東京 東京創元社 昭和34 (1959) 238 p. 図版 21.5 cm ふなのりシンドバッドの七つの航海 ほかに3編

ラング世界童話全集13 別巻
アラビアン・ナイト

昭和三十四年五月三十日 初版発行

訳者 川端康成

発行者 小林茂

発行所 株式会社 東京創元社

東京都新宿区新小川町一の十六
電話九段三三八五一―五
振替東京一五六五

定価二八〇円

落丁・乱丁がございましたら、おとりかえいたします。

印刷所 曙印刷株式会社 製本所 株式会社鈴木製本所

Printed in Japan 1959 ©

ラング世界童話全集
別巻／アラビアン・ナイト



もくじ

ふなのりシンドバットの七つの航海	6
第一の航海	11
第二の航海	20
第三の航海	30
第四の航海	42
第五の航海	54
第六の航海	62
第七の航海	74



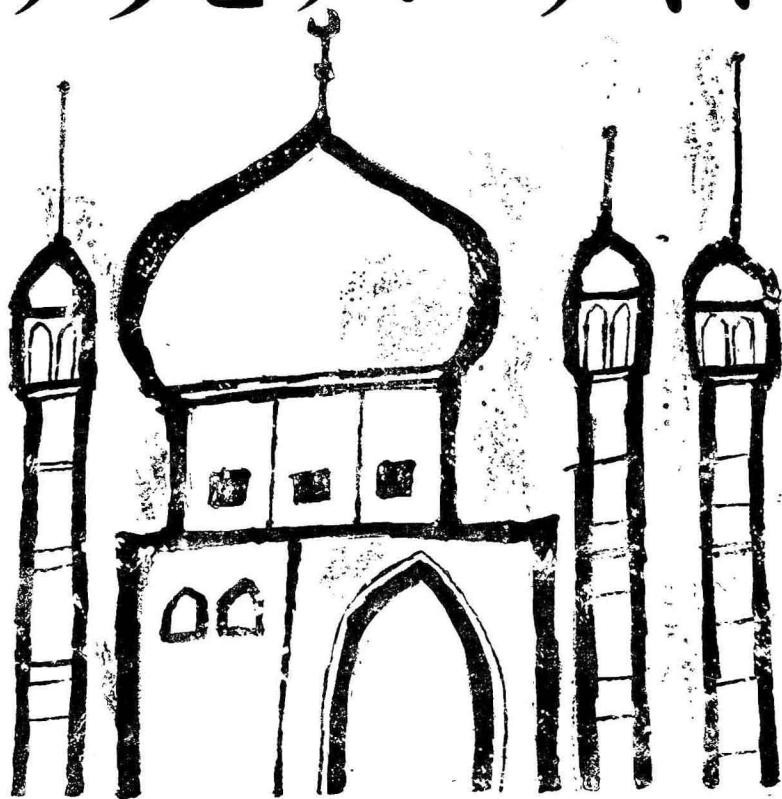
カマラルザーマン王子とバドウラ王女
おうじ
おうじよ
 34

アーメッド王子と妖精パリバズー
おうじ
ようせい
 150

魔法の木馬
まほう
もくば
 202

そうてい 大橋正／くちえ・さしえ 和田 誠

アラビアン・ナイト



ふなのりシンドバッドの七つの航海



ハルン・アル・ラシッド王の時代、バグダッドに、まずしい荷かつぎのヒンドバッドという男が住んでいました。たいへんあつい日に、おもい荷もつを、みやこのはしからはしまで、はこんでいかなければなりません。やっと半分しか道をいかないうちにくたびれて、しずかな通りがあつたので、荷もつを土の上におろし、大きな家のかげでやすみました。通りには、ばらのにおいをする水をまきちらしてあり、気もちのいいそよ風がふいていました。

すぐに、ヒンドバッドは、こんな気もちのいいところは、ほかにはないとわかりました。香木の、こころよいにおいが、家のひらいたまどからふいてきて、あたためられ、しき石道からたちのぼるばらの水のにおいと、まざりあうのです。その城のような家のなかからは、たくさん楽器をじょうずにひいている音楽がきこえ、ナイチンゲールや、小鳥たちのさえずりが、ヒンドバッドの耳にきこえ

ました。やがて、いろいろな、おいしいごちそうのにおいがしてきて、つばきが出てくるほどでした。それに気がつくと、ヒンドバッドは、たのしい宴会がはじまっているのだとわかったのです。

いままで見たこともないような、こんな、どうどうとした家に住んでいるのは、いったいだれかしら。ヒンドバッドは、このへんの通りへ、めったにきたことがないのです。ふしぎでしかたがなかったので、だれが住んでいるのか知りたくて、入口に立っている二三人のぜいたくなきものを着ためしつかいに、この家の主人の名まえをたずねました。すると、めしつかいはこたえました。

「なんだって、おまえはバグダッドに住んでいるくせに、ここに住んでいらっしやるのが、ゆうめいな、ふなのりシンドバッドさまだと知らないのか。太陽のかがやく海という海はのこらずわたった、ゆうめいなふなのりだよ。」

シンドバッドが、かぞえきれないほどの財産をもっていると、いままでに、なんどもきかされていて、荷かつぎヒンドバッドは、自分ほんなにみじめなのにと、運がよくてしあわせになっている人がうらやましくてしかたがないのでした。それで、顔を空にむけて、大きな声でいいました。

「この世の中のあらゆるものをおつくりになった神さま。シンドバッドとわたしと、どうしてこんなにちがっているのでしょう。まい日、わたしは、口にもいえないほどくろうをして、不幸で、いくらせつせとはたらいても、わたしや、わたしの家族たちに、大麦のパンしかやれないのです。それなのに、運のいいシンドバッドは、ぱっぱとおかねをつかって、ぜいたくにくらしています。シンドバッ

ドが、なにをしたというのです。神さま、あなたが、シンドバッドに、こんなたのしくらしをおさせになるのは！ また、わたしがなにをしたというのです。こんなつらいめにあわせるとは！」

そういいながら、おもわず、じだんだをふんで、すっかりじめな気もちになりました。すると、そのとき、めしつかいが、家のなかから出てきて、シンドバッドのうでをつかんでいいました。

「シンドバッドさまが、あなたにお話がしたいといっていますから、いっしょにきてください。」

こんなふうによびとめられて、シンドバッドは、すっかりおどろいてしまいました。おもわず口ばししたことばが、シンドバッドの耳にはいつて、きげんをわるくしたのだと、こわくなりました。それで、いまあずかっている荷もつを、通りにおきっぱなしにすることはできないと、いろいろないわけをしました。めしつかいは、たしかにあずかってあげると、やくそくして、ぜひ、主人のいったとおり、きてほしいとたのんだので、シンドバッドは、いかないわけにはいきませんでした。

めしつかいについていくと、ひろいへやにつきました。おおぜいの人が、いろんなごちそうをならべたテーブルのまわりにすわっていました。いちばん上手のいすには、背の高い人が、どしりすわっていました。ながい白いひげは、王さまのようにりっぱでした。いすのうしろには、たくさんめしつかいたちが、いつでもご用をきこうと、立っていました。その人が、ゆうめいなシンドバッドだったのです。シンドバッドは、あんまりどうどうとしたこの場のようすに、ますますおどろいて、ぶるぶるふるえながら、あつまっていた身分のたかい人たちに、あいさつをしました。

シンドバッドは、自分の右がわにヒンドバッドをすわらせ、おいしそうなごちそうを、ヒンドバッドのさらにもってやり、すばらしくおいしいぶどう酒をついでやりました。やがて、宴会がおわるころ、シンドバッドは、どういう名まえで、商売はなにかと、やさしくヒンドバッドにたずねました。

「だんなさま、わたしはヒンドバッドというものでございます。」

「ここでおめにかかれてうれしい。ここにおあつまりのみなさんも、わたしとおなじようによろこんでいられると思う。ところで、さっき、おもての通りで、どういうつもりで、あんなことをいったのか、おしえてほしい。」

シンドバッドは、宴会がこれからはじまるというときに、ひらいていたまどのあるいていて、荷かつぎヒンドバッドの不平をきいていました。それで、よんだのです。こんなふうになぜねられると、ヒンドバッドは、すっかりうろたえてしまつて、頭をさげてこたえました。

「だんなさま、じつは、くたびれてもいましたし、いらいらしていたので、あんな不作法なことをいってしまいました。どうぞおゆるしてください。」

「ああ、どうか、わたしが、あなたをしかったりしはしまいかと、心配しないでください。そうではありません。わたしは、あなたの気もちもよくわかるし、あなたを気のどくだと思つていのですよ。ただ、あなたが、わたしのことをまちがつて考へておいでのだし、ほんとうのことをおしえてあげたいと思うのです。わたしが、財産や、ぜいたくなくらしなどを、なんのつらいこともなく、

あぶないめにもあわずに、手にいれたとお考えのようですね。それでは、まるつきり話がちがいます。わたしがこのようなしあわせな人間になれたのは、ながいあいだ、くろうというくろうをし、あぶない思いという思いを、さんさんしてきたおかげなのですよ。」

そういうと、こんどは、あつまった人たちに、話をつづけました。

「ええ、そのとおりなのです、みなさん。わたしの、ふしぎなぼうけんがおわかりになったら、海をわたって、財産をさがそうと考える、どんなよくのふかい人も、思いとどまることでしよう。みなさんは、これまで、わたしの七つの航海の話や、また、海で、陸で、わたしの出あった、あぶないことや、めずらしい話を、おききになったことがあるでしょう。だが、それは、ずいぶんまちがっていると思います。だから、いまわたしは、のこらず、わたしの航海のほんとうの話をしましょう。その話は、みなさんを、きつとよろこばせることと思います。」

ところで、シンドバッドは、自分のぼうけんを、荷かつぎヒンドバッドに、じゅうぶんにきいてもらいたかったので、物語をはじめまえに、通りにおいてきた荷もつを、ヒンドバッドがとどけることになっていた場所へ、めしつかいにはこばせることにしました。そうすれば、ヒンドバッドはここについて、シンドバッドの話がきけるからです。

第一の航海

わたしは、両親りやうしんから、かなりたくさんざいさんの財産をうけつぎましたが、わかくて、おろかだったので、いろいろなあそびごとに、ぱっぱと、おかねをばらまいてしまいました。そのうちに、いまのように、つまらないことに、おかねをつかっていると、財産ざいさんに、はねがはえてとんでいってしまふと、わかってきました。それに、年をとって、びんぼうになったら、どんなにつらい思いをするだろうかとも、気がついたので、まだ手もとにのこっているおかねを、どうやったら、じょうずにふやすことができるか、考えはじめました。

それで、家のしなものいえをなにかも売りはらって、貿易ぼうえきに出かける商人しょうにんのなかまにはいりました。貿易ぼうえきに出かけるために、ととのえておいたふねに、バルソラというところで、みんなといっしょにのりこみました。

ペルシア湾わんにそって、東インドひがしのほうへ、帆はをあげてすすんでいきました。左ひだりにはペルシア湾わんの岸きしを、右みぎにはアラビアの岸きしを見ながら、すすんでいったのです。はじめのうちは、ふねがしきりにゆれるので、おちつかなかったのですが、じきにげんきになりました。そのときから、二どと、ふなよい

は、しなくなったのです。

ときどき、いろいろな島に上陸して、しなものを売ったり、とりかえたりしました。ある日のこと、風がぱったりやんで、ふねをすすめることができなくなったとき、小さな島のすぐそばにのりがわかりました。その島は、水の上にほんのすこしのぞいているだけでした。ふなのりたちは、帆をまきあげました。船長は、だれでもしばらく島へあがって、手足をのぼしたいと思うものは、のぼしていいとゆるしました。わたしも、そのなかまにくわりました。しばらくのあいだ、あるきまわって、もっていた食事をたべようと、たきびをして、すわりこむと、いきなり、島がものすごくゆれたので、おどろきました。

ちょうどそのとき、ふねにのこっていた人たちは、いのちがけでふねにのれと、大きなさけび声をあげました。わたしたちが、島だと思っていたのは、ねむっていたくじらのせなかだったのです。ボートのすぐそばにいた人たちは、ボートにとびこみました。ほかの人たちは、海にとびこみました。わたしは、自分をたすけるひまもなく、くじらが、あつというまに、海の底へもぐりこんでしまったので、たきびをするためにもっていた、一本の木ぎれにつかまったまま、海の上にとりのこされてしまいました。

そのうちに、そよ風がふいてきました。ふねにのりこんでいる人たちは、あわてて帆をまきあげ、ボートにのりこんでいる人たちは、ボートのまわりにしがみついている人たちをひろいあげました。

が、だれひとり、わたしをさがそうともしませんでした。こうして、わたしは、波にもてあそばれるまま、とりのこされてしまったのです。一日じゅう、海の上をただよっていました。こんなめにあったので、夜になると、もう、いのちはないものと、あきらめました。くたくたになってはいましたが、しっかりと、もうい木ぎれにしがみついています。朝の光りがさしはじめたとき、わたしは、ある島にむかってながされているのがわかって、どんなにうれしかったでしょう。

島のがけは、高くけわしかったのですが、運のいいことに、二三本の木の根がつきだしていました。それにすがって、どうにか、よじのぼり、がけの上の芝のはえたところに、のびてしまいました。生きていますというより



は、まるで死んだようにのびていると、やがて、空たかく、太陽がのぼってきました。そのころになると、ひどくおながすいてきて、わたしは、たべものをさがしに出かけました。しばらくして、たべられる草や、すんだ水のわきだしているいずみをみつけました。人ごちがついたので、島をたんけんに出かけました。まもなく、大きな草原につきました。馬が一ぴきつながら、草をたべていました。たちどまって、馬を見ていると、まるで、土の下で話しているような声が、きこえてきました。すぐに、ひとりの男がすがたをあらわして、どうして、こんな島にくるようになったのかと、たずねました。

わたしは、その男に、これまでのぼうけんをものがたりしました。すると、その男は、この島の王さまミレージの馬丁で、まい年、この草原へ、王さまの馬をつれてきて、やしなうのだと、おしえてくれました。それから、わたしを、なかまたちのあつまっているほらあなへ、つれていってくれました。みんながならべてくれた食事をたべると、おれたちにあえるなんて、運がよかったと思うがい、あすの朝になると、みんな王さまのところへかえってしまふから、だれもたすけてくれるものもなく、おまえは、人間の住んでいるところへいく道を、ぜったいにみつけることができないだろうと、話してきかせてくれるのでした。

それで、あくる日の朝はやく、わたしたちは出発しました。みやこにつくと、王さまが、わたしをやさしくむかえてくれました。わたしは、王さまに、それまでのぼうけんをものがたりしました。王さ

まのいいついで、わたしはていねいにもてなされ、ほしいものをあてがわれました。わたしは商人なので、おなじしごとをしている人たちをさがしました。とりわけ、外国から商売にきている人たちをさがしたのです。こんなふうにしていたら、バグダッドのようすもわかり、バグダッドへかえる手だてもみつければしないかと、のぞみをもっていたからです。みやこは海岸にあるので、世界じゅうのいろいろなふねがやってくるのです。

しばらくするうちに、めずらしい話をたくさんきました。また、わたしの国のことをいろいろたずねられました。いつでも、わたしは、いきあう人たちみんなと、よろこんでおしゃべりをしたのです。また、こうやってぶらぶらしているあいだに、キャッセルという小さな島をぼうけんに出かけました。その島は、ミレージ王のもので、デジタルという妖精が住んでいると思われていました。ふなのりたちは、夜、なんども、その島でたいこをたたく音をきいたと、わたしに、はつきり話をしました。だが、わたしは、そのときの航海では、べつにめずらしいものにあわなかったのです。ただ、ながさが二百キユビットもある大きなさかなに出あいました。運のいいことに、わたしたちがこわがるよりも、さかなのぼうが、わたしたちをこわがっていましたので、木ぎれをたたいておどかすと、にげていってしまいました。ほかのさかなは、ながさが一キユビットしかなく、その頭は、みみずくのようなでした。

島のぼうけんからかえってきいてから、しばらくたったある日のこと、波止場におりていくと、一そ